にる有なりとぞ、ちかく見たる人は申し、此松野火にやけにければ、源滿仲が任にまたうふ、其後又かに道貞が任にこふ、其後孝義きりて橋につくる、うたてかりける人なり、是より失たりとなく共なはをよむべし、歌林良材に、奥州武隈と云處に二本の松あり、これによりてこもたるといへり、はなはとは山のさし出たる所のある也、和中抄に、武隈のはなはとて、山のさし出たる所云のあるなりとぞ、ちかくわたる人は申し、敦長卿云、宮城野に武隈の松も侍れど、今はみえず、宮城の武くま、はなは館、ひとつ所なり、奥羽觀跡聞老志に、鼻端松樹は名取郡武隈館西にあり、岩沼驛より四五丁餘、小坂を過て其地にいれば、二樹相並て枝葉繁茂とあり、是鼻端松なり、岩代りまた岩沼驛の西五丁に二株松あり、是を先輩混じて一樹とするは誤なりといへり、

のむすびまつ　同上、岩代の松同事なり、いはしろの野中に立るむすびまつとよめり、

あこやの松　同上、出羽にあり、

なおりなじこと是もあれはのとあり、

あねはの松　同上、奥州にあり、

松同葛をよめりと云、

一夜松　同上、北野にと云、

御陰松　同上、攝州とあり、

あれはの松　同上、奥州

翁草　同上、異名なり、藏玉にあり、基後歌、住よしや庭のあたりの遠さとに五位くさ長ねもてみる人なかこちて、住吉の遠さとに五位

わたのかさ松　同上、

のまつと云松あり、かの松年ふりて翁とげんじてすみけり、恒に心をすまし琴をしらべけり、秋は菊を愛し、多く植けり、かの翁の歌、我庭はきしのまつかけ、まかぞすむ翁がくさの花もさかなんたり、是によりて、きくを翁草と申なり、彼翁と現れしこと五月なり、然にまつらん、とにもあり、

手むけ草　同上、見る、是も藏玉にあり、山里の古き軒端の手むけ草花はのよそなる名殘とぞ住吉にある神やうふけんと詠ぜるまつもこれなりと見えたり、

初代草　同上、

延喜草　同上、是も異名なり、藏玉春部なり、はるの澤のひきまくさはなにさきけりゆきにおはれて、

色無草　同上、なく露も常の盤の名なる色なき草かりそめの間も秋は來にけり、

豐喜草　同上、藏玉にあり、異名なりとあり、

百草　同上、ふるき物にありと

大内やもいしき山の初代草いくとせ人になれて立ら乙、正月二日大内に植松有り、門松也、是も藏玉に有、

是なり、異名なり、藏玉秋部にあり、

草同上、あすかき立つる宿のとき時は草風も夏なき時

にこそあへ、これも藏玉にあり、雜部に入なりと云、

ふい、

千枝草　同上　都草　同上

〔易林本節用集　天草木〕貞（テイ）木（ボク）松也。

〔古今著聞集十九　草木〕松樹を貞木といふ事は、まさしく人のためにかの木の貞あるにはあらず、霜雪のはげしきにも色をあらためず、いつもみどりなれば、これを貞心にくらぶる也、貞松は年のさむきにあらはれ、忠臣は國のあやうきに見ゆと、潘安仁が西征賦にかけるもこのこゝろなり、

〔大和本草十一　園木〕松　マツハ、タモツノ意ノ上略ナリ、モトマト通ズ、久ク壽ヲタモツ木ナリ、史記龜策傳、松柏爲二百木長一而守二門閭一、松ニモ亦雌雄アリ、雌松ハ其葉美ナリ、葉小ク木皮赤シ、茯苓ハ雄松